

光の子



No.138 2009.11.15

●年間聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。(ヨハネ福音書12章24節)



「みんなで良く手を洗いましょう」

挿絵・中島英子

「登校児」

威銃ぐらりと夕日沈みけり

茶の花のほのと泛きたる日暮かな

ねんごろに炎をそだて田を仕舞ふ

山風をさそひ出したる火吹竹

かりがねの夕べ明るき水の面

霜晴の畦を弾んで登校児

狐火に取りかこまれて終ひ風呂

黛 執 (春野「主宰」)

数年前に全国児童養護施設協議会が「子どもを未来とするために」という小冊子を出した。それには児童養護施設でよりよく子どもたちを育てるためにすべきこと、してはいけないことなどが親切丁寧に書かれていた。それから数年経った今、児童養護施設で暮らす子どもたちは未来となるための希望を持つことが出来ていくのだろうか。

光の子どもの家25回目の秋 子どもたちに希望を 菅原哲男

児童養護施設における不祥事はこの十数年、ほどの間、ほとんど無くなったことはないだろう。子どもと大人の性的な関係、子どもが受ける暴力や不適切な言動、子ども同士の想像を超えたいじめなどなどである。日常的な生

活水準は劣化の一途をたどっているように思える。子どもたちにとって、社会福祉施設という公的な故に規制が先行する場面で、かなり狭苦しい私的な生活を送ることは、双方にかなりの無理と矛盾を強いるのである。子どもたちにとっては児童養護施設での暮らしがそのまま私的な生活である。一方関わる側のいわゆる専門職たちのほとんどは子どもたちとは全く次元の違う別な私的な生活があるのだ。賃労働者、つまり、与えられた時間の中で他人の問題としての問題を解決するのである。これは人間関係が良好な時は機能する。しかし関係が悪化すると事件になるのである。これは児童養護施設に限ったことではない。愛し合った異性たちが暮らすを重ねるまでもなく破局を迎えること多いではないか。暮らしに必要エネルギーは想像を超えるものがあるのだ。

を重ねても状況は改善されないのだ。子どもたちが子どもである間は私的な暮らしのなかで育つものである。私的な生活は当事者相互の献身によるものなのだ。そのような豊かな私的な生活様式が社会的自立には必然なのである。私的な生活様式の応用が社会的な生活様式なのであるから。

先人の児童福祉法改正で、児童養護施設の目的に自立支援が加えられた。この時、厚生労働省担当部局や議会も、十八歳での社会的自立は困難という見方が支配的だった。そこで二十二歳を最高とする措置延長が法に加えられたのだ。前年度末高校三年生に該当する者にも措置延長の恩恵に与らせようと通知まで出しているのである。措置延長制度利用についての条件はない。条件はないが地方の首長の判断によっている。だから地方自治体の事情や考え方により判断が違ってくるのだ。この点が地方への権限委譲の大きな弱点といわれる。

おかげさまで、光の子どもの家は四半世紀にわたり高校全入を果たしてきた。卒業生の十数人が大学や専門学校に進んだ。この中の

光の子どもの家 第25回「感謝の集い」に出席して

評論家 芹沢 俊介

小寒い秋のよく晴れた午後、ひととき、広い庭にいくつものテーブルが並んでいます。正午過ぎに到着した私たちは、用意されていた席につき、配られた心のこもった手作りの豊かな弁当を、温かいトン汁と一緒に馳走になったのです。祝会とは私たちにとって、食べる会なのです。食べた以外の他のことは何一つ記憶にありません。

去年も、おいしかったなあ、だから、今年も参加したいと私の胃の腑が言いました。しかし、私の頭が言い返しました。おまえは食べるだけだからいい、おれなんか、「一言、挨拶を」、などと言われるのだぞ、そのたびに身の縮む思いをしながら咳払いを一つするのだぞ、それさえなければなあ。……こんなふうには胃と頭の葛藤を抱えながら、ここ三年ばかり祝会に出席させてもらっています。そして、祝会の後も居残り、恒

例の全員での夕飯の会食の席に、子どもたちのあいだにはさまって座っている自分を見出すのがたまに喜ぶのです。

あらためて、十一月三日の「感謝の集い」、連れ合いの美保ともども、すばらしい一日をありがとうございました。訪れるごとに子どもたちの成長が目当たり感じられ、うれしくてなりません。施設長の田中郁夫さん、いちいちお名前があげませんが、職員の方々の居続ける力です。

ああ、そうそう、菅原哲男さんの存在も忘れるわけにはいきません。ついでのように記したのではありません。「居続ける」という、経験にしっかりと根ざした実践を児童養護施設の職員の最重要課題として、私たちの前に言葉にして提示してくれたのは、菅原さんだったのです。養育現場の外から、養育現場——家庭と施設——に向けて、自前の養育論を書きたいと

柄にもなく欲張ったことを考えていた私が狂喜したことはいうまでもありません。いや、私ほど狂喜した人間はいなかったのではないのでしょうか。いろいろ、菅原さんは私の憧れの人となったのです。

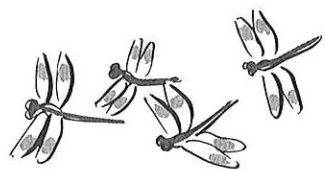
なぜ「居続ける」ことが職員の最重要課題なのでしょう？この問いに対する菅原さんの答えは至極シンプルで、かつ本質的です。それこそが、ここで暮らすすべての子どもたちが、生きる上で必須であるにもかかわらず、十分にも行うことができなかったものと深くかわわっているから、ということです。

私はその「必須のやらうべきもの」を受けとめられ体験という言葉で呼んできました。受けとめられ体験は、そこに受けとめ手がなければ不可欠の条件です。そのようにして、受けとめ手はその子にとっての特別な存在になるのです。

さきほど、光の子どもの家を訪れるごとに子どもたちの成長が目当たり感じられ、うれしくなります、と書いたのは子どもたちのなかに、そうした受けとめ手の顔が見えるように感じられたからなのです。だから、子どもたちは

安心して、安定的に自分が自分であるという同一性の感覚を持てるのではないか、そのように子どもたちがいて、そのような子どもたちのあいだにはさまれて、当たり前のように私たちがいるということが、よく考えたらなんとかが得がたい貴重な恵みのように思えてくるのです。

おいしい祝会にまた、招いてくださるとありがたいと思います。



「共育ちカンガルー日記」

近藤みちる

(3) ママ友の法則

娘を身ごもったのは四十歳を過ぎてのことで、妊娠も安定期に入るともつばらの心配は「ママ友ができるだろうか」ということだった。出産年齢が高齢化しているとは言っても、産科の待合室で顔を合わせるプレママ達は二十代から三十代前半までがほとんど。母親学級で幾度か顔を合わせても、話題の糸口すらつかめなかった。

だが案ずるより産むが易し、いざ娘を出産してみると、入院中の授乳室、保健センターの育児相談会、公民館の子育て広場と、自分と同じように赤ちゃんを抱っこしたママであふれている。「お誕生日はいつ?」「お名前は何?」と、赤ちゃんを挟んで自然に声を掛けあえるのだ。しかも「おっぱいの出が悪くて」「私も!」「なかなか寝てくれないで」「うちの子も!」という具合に、同じ育児の悩みの真っ只中もがいている戦友として強い親近感を覚え、私にもたちまち数人のママ友ができたのだ。

ママ友という関係においては、ママの年齢や出身地などのプロフィールは伝えあうことはほとんどない。名前だつて必要ない。お互いを呼ぶ時は「〇〇ちゃんママ」と呼べば事足りるのだ。肝心なのは子供のプロフィール。特に乳児期は誕生日に近いことが何より重要なことで「寝がえりうった?」「離乳食始めた?」「体重何キロ?」など、話題ももつばら子供達の成長発達に関してが中心だ。まだ外遊びが出来ない時期なので、誰かの家に集合し、傍らで子供をあやしなからママ達はお茶を飲んでおしゃべりに花を咲かせる。

子供が一歳を過ぎ歩き始めると、いよいよ公園デビューである。子供と一緒に近所の公園へ毎日通いながら少しずつ顔を売り、ママ友を増やしていく。ここでも重要なのは子供のプロフィール。誕生日が近くて同性であれば、たいていはメールアドレスの交換となる。私も何人かのママとメールアドレスを交換するまでに

換するまでになった。

その中には二回り近くも若そうなママもいる。お互いに歳を聞かないのが暗黙のルール。子供の月齢が近ければ「タメ口」で気軽に言葉を交わす。敬意を払うべくは子供が一歳以上の場合で、幼稚園に通つていればそれだけで一目置かれる。上の子が小学生などと聞けば、もうお局様の域である。こうしたママ友特有の交友関係は、自分や相手の「人となり」とは無縁で成り立っているのでも気楽な関係だ。しかしある時ふと、ママ友と友達の違いって何なのだろうと考えた。子供のことはかりで、ママ自身のことをお互いにほとんど知らない関係が、果たして友達といえるのだろうか。アドレス帳の名前欄に「〇〇ちゃんママ」と登録しながら、名前すら知らないなんて、ちよつと淋しいなと思うようになってきたのだ。

みんな子供の名前のことは一生懸命話すのに。思えば母親になったとたん、名前と呼ばれることがめつきり少なくなつた。公園でも保健センターでも「ユキちゃんのママ」と呼ばれ、夫にさえ「おかあさん」と呼ばれる毎日だ。

ある日のこと、私は思いきつてママ友たちに自分の名前と名付けの由来について話してみた。そしてみんなの名前を聞いてみたのだ。みんなとても素敵な名前だった。中でも「ますほ」さんは、

国語の教師である母親が名付けてくれた名前だそうで「紅の色の意味なの」と少し照れながら。とても素敵な笑顔で話してくれたのが印象的だった。それからというもの、私たちはお互いを名前と呼び合うようになった。はじめは少し照れくさかったが、今ではすっかり慣れてしまった。主婦になる前にはどんな仕事をしていたかとか、趣味やら特技やら話題も広がった。そのうちに年齢にも話題が及ぶのではとはらはらしつつ、彼女たちにならカミングアウトしてもいいかなと思えるこの頃である。

夕虹を指してママ友ふやしけり
みちる



エッセイ

仙台へ

彫刻家 中島 睦雄

急に仙台行きが決まった。家内の姉から電話があつて「お母さんの所に行ったら、英子が来ないと言つていたよ。たまには顔を出しなさい。」という事らしく、家内も急に仙台行きを言い出した。

そんな事で「あした仙台へ行こう」と決まった訳である。

母は(私にとっては義母だが)現在九十九歳。十一月には満百歳を迎える。現在仙台の病院付きの老人ホームに入っている。

連休明けの土曜日、十時頃、家内と二人で車で出かけた。休日は高速道路が混むらしいので、お茶とおにぎり持参である。

加須のインターチェンジから入ってみると、思ったよりも車が少なくて、それだけに、みんなびゅんびゅん飛ばしている。

「おやおや、忙しい人が多いんだね。こっちは別に決まった時間はないんだから、どんどん先に行つてちようだい。」などのんきに走つていく。ただし或る程度流れに乗つて

そこへ白いスポーツカーが後からものすごいスピードで走つて来た。「おれの車はそこいらの安物とは違うんだ。」とでも言わんばかりに、車と車の間を縫うように走り去つていく。ところが、間もなくその車は覆面パトカーにつかまってしまつていた。「それみる、いくら高級車でもあのスピードじゃあ無茶だよ。」

など冷やかしながら、単調なドライブの途中で多少の変化を与えてもらつたりした。北へ北へと車を走らせていくと、両側に美しい黄金色に色づいた広大な稲田の広がりが見えてきた。実に美事である。家内もその光景に感動し「稲がきれいね。」とつぶやく。私も思わず「イイネ!!」と答える。家内はすかさず、へたなシャレと言わんばかりに「ゴホ、ゴホ。」と、わざとらしく咳をする。天候の関係だろうか、稲の種類なのだろうか、今まで見た事もない程美しい黄金色のみのりである。そんな光景も間もなく視界から去り、山間の高速道路

を北に走つて行く。仙台泉インターチェンジが、我々の降りるところである。三百キロメートル位走つただろうか、仙台の旧市街とは違って、比較的新しく開けた街を通つて、目的の老人ホームに着いた。入り口でカードに必要な事項を書きこみ、少し行くと、職員の方々が明かるい表情で挨拶してくれる。三階の母の部屋に入ると、母はベッドに横になつていて、小さな声ではあったが「すまないね、遠いところを無理しなくても良いのに。」と我々を迎えた。

家内は、自分と身のまわりの近況を伝え、母の様子などを聞いたりしていた。その間、母がコードのついたボタンを押すと、若い介護士さんがすぐやつて来た。「これをこつちに、こうやつてください。」と母が伝えると、「はい、はい、こうしましうね。」と、実に親切に、明るくやつてくれる。「この介護士さんたちはね、みんなとても親切なんだよ。」と母も感謝しているようであった。部屋の外の少し広い所に、テーブルを囲んで腰かけている老人達にも、介護士さん達は、実に親切に接していた。

最近、介護士さんや看護師さんの不足がニュースになったりするが、

天使のようなこの方々に対する待遇が一番問題なのではないかという気がする。仕事の重要性、仕事の大変さに充分見合った待遇がなされていないのだろうか。おそらく勤務条件や給与の面が不十分なのではないかと想像する。

「あのね。」と母が言い出した。「圭子のところに電話してみな? 番号は022-219-0000だから。」これには驚かされた。さすがに体は不自由で、かなりの介護を受けているのだが、頭の方は健全な部分が残っているらしく、娘の嫁入り先の電話番号を正確に記憶しているのである。

間もなく百歳を迎えるという人が、ベッドに横たわっている状態で、正確に、すらすらと数字を並べたのである。

家内と私は、母に直接会つて、最近の体の調子や心の状態について或る程度感じ取れたし、また、いつもながら介護の現場のほんの一端に接し、考えさせられたりしたものである。帰りの高速道路も、順調に走れた。もち論、びゅんびゅん飛ばすような事はしなかった。少し日暮れに近かつた為、あの美しい黄金色の田んぼの広がりは、はつきりとは見えなかつた。

河のほとり

倉澤家

「こんにちはわー！倉ちゃんいるー！」という元気の良い、お隣りの渡辺さんの奥さまの声。(でも「何で倉ちゃんなの？フレンドリィでうれいけど、何で知ってるんだらう？」と不思議に思いながら玄関に行くとき「成黎ちゃんいるー！おみやげだよー！」最近耳の悪くなってきた担当者が、成黎ちゃんを倉ちゃんと聞き間違えていたのです。渡辺さんの奥さまは、娘さんの住む北海道に行ってきたご主人からのおみやげを、成黎にと届けに来てくれたのです。また、夏休み中にゴミ出しの手伝いをして成黎を見て、「偉い！ゴミ出しのお手伝いのごほうびだ。」とお菓子をいただいたことでもあります。引越してきて二年で、成黎はお隣りの渡辺さんご夫婦とすっかり仲良くなりました。また、登校途中にあるお宅の御主人とも、いつ親しくしていただ

くようになったのか、挨拶をかわしたり、帰りに立ち寄って話し込んでいたり、お菓子をいただいたりしているようです。

他にも、担当者の知らない所で友だちの輪(ワジ)を広げている成黎。社交性の豊かさは、倉澤家で一位かもしれません。

ただ、残念なのは同年齢の友人の少ないこと。個性の強い成黎は、年上の方たちには受け入れていただけでも、同年齢からは疎外されがちです。でも、これだけ多くの方たちから愛されている成黎には、それだけの魅力があるということ。その魅力に磨きをかけ、更に友だちの輪を広げてほしいと願っています。

倉澤 智子



子どもたちの季節

仙道家

夜になると冷え込み、秋の気配が感じられる今日この頃。いかがお過ごしですか。

突然ですが、この二学期から正太郎が家庭復帰をし、転校しました。先日、転校先で運動会があるというので、関係の深かった彬を連れ、見に行ってきました。ですが、生憎の悪天候で、私たちが到着すると同時に中止になり、一つも競技を見ることが出来ませんでした。とても残念でしたが、校舎に入る直前にお母さんが呼び止めてくれ、会うことが出来ました。正太郎がここを出てから、それ程経ってはいませんが、会った瞬間ニコッとほかにんでくれた正太郎の表情はとても懐かしく、愛おしく感じました。

新しい学校生活で緊張や戸惑いがある中、笑顔で頑張っている正太郎、新たな一歩を踏み出したご家族をこれからも見守っていきま

いと、改めて思いました。

山口 貴子



光の中で

佐藤家

今年の夏休み高野グループのお盆行事は、長野県佐久市にある谷本清光画伯のアトリエ阿登久良山荘にお世話になりました。忙しい日常を送っている私たちにとって八ヶ岳の山々に囲まれた絶景とアトリエの名画の中にあるとゆつくりと流れていく時間の中で私の疲れた身体や心は自然と癒されていくのがわかります。それは子どもたちも同じで、普段は部活で忙しい早希は家では見ることでできない穏やかな表情です。高小生の浩伸は谷本先生の星座の絵に影響され、まるで内弟子のような働きをしながら数枚の絵を描き上げていました。

アトリエには谷本先生ご夫妻の心が込められており建物全体の空気が子どもたちや職員達の心を優しく包んでいるのだと思います。この雰囲気や日常の生活に少しでも取り入れることができれば生活の質が豊かになると感じました。

穴水 祐介

原田家日記

天候不順が続いたこの夏休み、ようやく夏らしい空が見えるようになったお盆の後、伊東市宇佐美にある増田様の別荘をお借りして、子どもたち四人と大人三人で楽しい時間を過ごしました。初日に城ヶ崎という断崖絶壁の岩場へ向かいました。柵などはほとんどなく、切り立った岩場から海をのぞき込み遠くで打ち付ける波を見れば落ちたら命がないことは本能的に分かるはずですが、子どもたち、特に誠一はへっちゃらで崖の突端まで行って得意そうにいました。途中まで付いてきていた池田保育士は吊り橋を渡る手前でいつの間にか付いてこなくなり、どこかへ



消えてしまっていたというのに。翌日は下田の海まで行き、快晴の白い砂浜で一日過ごしました。カリフォルニアから来たのに太陽に弱いケニーは、真っ赤になって「せなかないたい」と騒いでいました。三日目も恵まれた天候の中、最後に大室山から伊豆高原の絶景を拝み、その後無事家に戻りました。短かったけれども楽しい三日間でした。ありがとうございます増田。

小西 剛史

季節のおとずれ

竹花家

今年の夏休みもたくさんの方々にお世話になり、子どもたちが楽しい夏の思い出を作ることができました。大変感謝いたします。竹花家では池田様のご厚意により佐渡が島で色々な経験をさせて頂き、たくさんのお思い出とともに子どもたちもまた一回り成長したのではないのでしょうか。ありがとうございます。

二学期が始まり、秋の一大イベント運動会が行われました。運動会までの約三週間、子どもたちはダンスや歌、徒競走、組体操など様々な競技の練習に追われます。夏に真っ黒に日焼けしたと思っていれば、みんなさらに真っ黒に。頑張っている子どもたちに私ができることと言ったら、応援とお弁当作りくらいです。事前にお弁当のリクエストを聞くと、「サンドウィッチとおにぎりとおいなりさん！サンドウィッチはジャムとツナマヨと卵とハムチーズ！おにぎりはゆかりで、唐揚げとウインナーも」と子どもたちからは細かいリクエストが。運動会当日、



牧野 由紀子

みんなのリクエストに応えたお弁当を持ち応援へ行きました。去年は五〇mをひとり走りきることができなかった二年生の冬子。今年も練習ではなかなか最後まで走ることができませんでしたが、一番では最後まで諦めず立派に五〇mを走りきることができました。鼓笛で念願のフラッグを担当した要は、堂々とした演技を見せてくれました。毎年リレーの選手に選ばれている美也子は、運動会三日前に足を捻挫してしまおうというアクシデントがありながらも、本番は美也子らしい力強い走りやバトンを繋ぐことができました。家では見せない子どもたちの顔を見ることができ、今年の運動会もとても感動的な一日となりました。

アメリカで その4

菅原 哲男

養育など「暮らし」や「育ち」などに関する社会福祉施設を利用する者と、提供する者の間にある乖離は、アメリカでは問題にならないのか、と、ケンタッキー大学院のある教員に聞いた。もちろんそのことは大事なことだが、良質なサービスを提供する者にふさわしい待遇は問題になっていないという反応だった。現に医者患者の病によって職業が成り立っているが、患者の暮らしに比例した待遇でなければならぬとは思わない、と答えた。正解なのだが腑に落ちないまま何度かそのことでは議論をしてきた。

もちろん人に関わる専門職にはそれ相当の困難があるのだろうが、医療などの専門職と、暮らしや育ちの専門職の決定的な違いは、共感性の有無によるものだろうと今も考えている。お互いに居あうという条件の中で、共に痛み、共に苦しみ乗りこえ喜び合っていくことが養育の原型だと思っからである。

また、児童養護施設光の子どもの家の責任担当制による家庭的養育あり方についても論述した。入所後約半年ほ

どは、「絶対受容」を心がけることについてである。

生まれてからここに来るまでの間、絶対的な受容……愛されることがなかったか、あってもごく少ない経験の子どもたちがやってくるのである。全面的な受け止めが可能なのは、愛されるという関係の中でだけなのである。赤ん坊が生まれてくると圧倒的な愛着対象として存在する。周りの者が、「可愛い」と引きつけられる。だから抱き寄せることが可能なのだ。だっこの保持つ不思議な作用がお互いの中で始まる瞬間なのだ。

愛することの導因にはかなりプライベートな条件があると思う。私が一緒にいたいと思うのである。愛なしに子どもは育たないことは洋の東西を問わず確認されている。愛し、愛されることは、相互に無条件でなければならぬ。

光の子どもの家に入所依頼があり、応諾した場合にその担当者を会議等で協議して決める。しかし、具体的にその子を受け止める担当者の決定に、担当しようという者の個人的な決意が先

行することを意識してきた。その子どもを引き受けることを、誰かに相談して決めるのではない。まさに私がそう考えよう思うかがとても大切な要因なのだと思うからである。その決意を関わる者すべてが保証するのでなければならぬのだ。

私たちがこのはたらきを志す時、誰かに言われたからそうするのではないことと同じことなのだ。ましてや、どんな理由であつたとしても、親や家族から離別し、独りになり、先行きが全く不明な状況の中で、「施設入所」となるのである。不安と絶望のつづの中であつたらは入れられるのである。受け入れるのに誰かが決めたので仕方なく、という事態を避けるのだ。

ここでは、交代勤務をしていない。これは原則中の原則なのだ。朝の家族と夜の家族の人格が恒常的に変わるといふのは家族ではないと思うからである。一方、労働条件の改善は運営の任に当たる者の果てしもない責務である。はたらく条件を向上させたら、それがそこで育つ者たちの利益にならないければならない。担当することの数を減じていくことにしている。創設の時、担当者一名について五名以下の子ども数とした。その頃保育士や指導員など、直接処遇職員一名につき六名が公的な最低基準だった。現在も、三十六

名の子どもに、十六名の直接処遇職員を確保している。

そんな話をしていく途中で、これはケンタッキー、インディアナ大学院でもあったが、「それではスタッフのプライベートな生活は保障されないではないか」「それはどうするのか」という質問があつた。

決まって、「働くのではなくはたらくのである。」と答えた。はたらくの中に、機能という意がある。家族にはそれぞれはたらきがあると。

ケンタッキー大学院では、中年の教師が立って、「それは……何か宗教的な献身のようなもののようなことか？」と更に質問してきた。

「あなたにはお子さんが居るか？」と逆に質問した。

「三人いるが……」と怪訝そうに答えた。

あなたがお子さんを育てる時に、すべてギブアンドテイクな関係でそうしてきたか。そうではないだろう。子どもの適切な育ちと、安心で安全なことだけのために、力と思いを尽くされてきただろうと思う。

子どもは、人は誰かの献身的なはたらきを受けなければまっすぐに育たないと考えている。と答えた。自然に拍手が室内に満ちたのだった。

現場から

続・光の子らしく

38

岩崎 まり子

金木犀の花の寿命は、こんなに短かったかしらと思う程、あの香りはあつという間にふわっと消えてしまいました。

皆さま、お元気ですか。

昨年度までの反省もあり、今年度のお盆期間、私は留守番させて頂きました。「だから、いつでも大丈夫だよ。」と連絡したところ、何年かぶりで萌季の帰省となりました。

「萌季が今晚、帰ってくるって。」そう伝えたときの理奈と丘実の喜びようと言ったら……。

仕事明けで来たので、こちらに着いたのは真夜中過ぎ。その後、



ひとしきりダイニングでしゃべっていたので理奈たちの部屋に戻ったのは夜中の二時くらいでした。いつもは理奈、丘実と私の三人で寝ている四畳半に、今夜は萌季を加え、四人で雑魚寝です。卒園生やお客様用の部屋はセンターにあるのですが、萌季も「面倒臭いからここがいい。」と言うし、理奈たちの願いでもあるし……で、いつものこのパターンです。ちよつと灯りをつけたところ、丘実はムクツと起きて萌季を見てニコツと笑いかけてパタツと寝、理奈にいたってはガバツと起きて萌季を見つけたと、その喜びをどう表現しているのか分からないと

いう様子でヒョッコヒョッコと言いなから（正確には少し違うのですが、うまく表現できなくてすみません）おしりて跳ねてしまいうくらいでした。そんなもの凄く歓迎を受けた萌季は、少し照れたように、「今の何？小動物？」と笑っていました。

大人になつても、自分の存在に絶対的な自信を持つことは簡単ではないと思います。

萌季も、数ヵ月後に迫つたアパートの契約更新の際の保証人をどうするかで悩んでいました。前回、親に頼んだときにむこうの家で大騒動になり、随分な批判にさらされたようです。どんなに客観的に見てもあまりにも理不尽です。血縁による「家族」に頼ることが「普通」とされているこの世の中で、その心許なさを実感しなければならぬ萌季たち。それがどれ程の試練なのか、私などには到底わかるはずありません。

「自分という存在は、あの家族にとつて何なのか」「自分は居ていい存在なのか」——そんな悩ましい自問自答に直接答えているわけではないのですが、理奈たちの、あの喜ぶ姿が確かな一つの答えとして萌季の心に刻まれてい

ることを願わずにいられません。私と一緒に留守番に付き合ってくれた理奈と丘実を連れて、先日、一泊旅行に行つてきました。以前出かけたときに丘実が、「あんなところに泊まってみたくない」とつぶやいた、海辺の高層ホテルです。

丘実は、夕食バイキングをととても楽しみにしており、当日は、カニの食べ放題に果敢に挑戦していました。

「ママは、丘実たち、特別って感じだから好き。」と言つた丘実。一緒に居る、居続けることで特別な関係になつていく——その地道でダイナミックなつながり方は、理不尽な血縁とはまた違う次元で彼らを励まし合ひ続けているように思います。

「特別」をつくっていく——そんな意識を持ちながら日常を過ごしていきたいと願っています。



2010年度も基準外職員確保のための
 『小さくても大バザー』を行います。
 バザーの品物のご協力を
 よろしくお願ひします。

光の子どもの家
 バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2009年6月1日▶2009年7月末日

2009年6月現在

幼児5名 小学生15名 中学生8名 高校生7名 措置外5名 計40名

- 1日 国際福祉協会（ILBS）受領式にロシア大使館へ田中施設長と菅原SVが出席 長年のお支えを心から感謝
- 6日 基準外職員確保のための「小さくても大バザー」開催 大盛況で474,056円の売り上げ 物品のご協力また出店して下さった多くの方々に感謝
- 9日 中学校との連絡会 教育機関との連携は育ちの支援に欠かせない 先生方御多忙の中ご協力感謝
- 25日 カリフォルニア州立大学デイビス校の学生ザックとケニーがJCHIPインターンシップ生として光の子どもの家に到着 夏の2ヶ月間を子どもたちと共に過ごしながら日本文化や日本語について学ぶ

7月

- 1日 社会福祉法人くるみ会の方々が12名来訪 これからの施設設立に向けて光の子どもの家の取り組みまた建物を見学 お互いが良いはたらき人となるように意見を交わす
- 6日 3歳の女の子松山小雪ちゃん入所 子どもたちみんなに可愛がられて笑顔いっぱい抱っこ好きの甘えん坊 牧野保育士が担当

- 8日 光の子どもの家後援会によるそば会 前日から用意して下さったうどんやそばをおいしく頂く 感謝
- 18日 夏休みオープニングパーティー 人間が最も活動的になる夏を迎えて子どもたちまた職員の抱負を披露し合う 互いに高められるような夏にと決意
- 23日 小学校低学年の子どもたち7人を連れて筑波山登山&キャンプ 全員で登頂成功 お互いの頑張りを大いに讃え合う
- 25日 古河の神輿様のご招待で古河市夏祭りへ子どもたちが参加 大きなお祭りの熱気の中子どもたちは出店に夢中 ご招待感謝
- 29日 小学校高学年の子どもたち9人を連れて日光男体山登山&キャンプ 天候も心配されたが晴天に恵まれ無事登頂成功

<6・7月の物品ご寄贈者>

小豆沢あずさ 渋谷みさ子 松本明子 原田 井村菜子 齊藤千恵子 中江智恵子 松本静江 吉田かづ子 真田明美 奥田哲也 井村英子 セカンドハーベストジャパン ステラ 橋本春江 土信田隆 高橋 梶原完 横村すみ子 宝月寿子 鎌田和子 島崎なぎさ 他多数の御各位様

☆皆様のお支えの中で私たちの歩みが支えられ子どもたちの笑顔が創られます 心より感謝申し上げます 今後ともよろしくお願ひ申し上げます (洋)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆例年に比べ暑さもさほど厳しくなかつた夏が過ぎ秋に入ってめっきり涼しくなりました☆年度の折り返し地点を過ぎて自分たちのはたらきを省みてよりよい暮らしを創っていくために自立支援計画の見直しを進めております☆全職員で子ども一人ひとりの生活を見つめ直し年度末までに残された約半年の貴重な時間を子どもに健やかな成長また力強い自立に還していくために必要なことは何か☆子どもたちの声にならない要求を丁寧にならぬ自分たちが出来ることとまたすべきことを精査しております☆目に余るのは私たちの足りなさ☆この夏も足りなさを補って余りある多数の方々のご協力とお支えを頂きました☆お盆期間には佐渡・宇佐見・秋田・長野の小海とたくさんの子どもたちがお世話になりました☆皆様のご助力あってこそ子どもたちがこんなにも豊かな成長を見せてくれることに心より感謝申し上げます☆今後ともご理解ご支援をよろしくお願ひ申し上げます☆ (洋)